

高校 岡山県知事賞

彼女が見せた姿

倉敷市・川崎医科大付属高1年 岩本 えみりさん

驚き、困惑したことを今でも覚えている。彼女は難民選手団の一員としてダンスの演技中に祖国への訴え「アフガニスタンの女性に自由を」と記したマントを着用し、失格となった。英姿、雄姿、麗姿。「姿」には多く表現されるものがある。しかし、その「姿」を見せることは、実は誰にでもできる簡単なことではないと知った。

オリンピックで政治的表現を行うことは、選手生命を絶つ事と同じである。命がけ、とでも言おうか。なぜ彼女はそのようなことをしたのか。記事にある「だからこそ見せたい姿がある」。ここに答えがあると私は思う。彼女の見せたい姿、それは踊っている姿ではない。栄光を勝ちとる姿でもない。自分の主張を曲げない、信念を貫き通す姿だ。彼女が見せたその姿が、今でも私の記憶に深く刻まれている。

彼女は言う、「私の夢は、踊ること、歌うこと、やりたいことを自分で選ぶこと」。彼女は知っている。自分のやりたいことと幸せは、完全なイコールでは結ばれないということを。自分のやりたいことを貫くことで、いばらの道を進むことになるということを。

私は将来医師になるという夢を持っている。しかし、大人に近づくほど、自分の夢や可能性について現実的に考えるようになっていった。そんな時に彼女の姿を見て、自分の今の姿を強く意識するようになった。今、私にできること。それは、学校行事に全力で取り組む姿、前向きに勉強する姿を見せること。それを通して実現していきたい。いつか、思い描く理想の医師になった姿を。

岩本えみりさんが題材にしたのは、パリ五輪ブレイキン女子に出場した難民選手団所属アフガニスタン出身選手を取り上げた朝日新聞の記事（2024年7月21日付）です。取材対象の了解が得られず、掲載できませんでした。ご了承ください。

「抑圧に負けず私は踊る」。そう言った彼女の名前はマニージャ・タラシュさんだ。「タリバン（暫定政権）にとって、ダンスは『罪』。でも、踊っている時は、難しい問題から解放される」。そう語る彼女は、命と隣り合わせの生活による恐怖やストレスで十分にダンスをすることができなかった。その後、彼女は難民として移住して自由になるも、祖国で抑圧される友人たちが気がかりだったと言う。日本では誰もが自分のしたいことを実現することができる。しかし、そんなチャンスすらない人たちがいることに、私は驚いた。

そんな中で決まったオリンピック出場。彼女の祖国では女性のスポーツを禁止する。「だからこそ見せたい姿がある」。2024オリンピック。テレビを見ていた私は、そこで祖国の自由を訴える彼女の姿を見て

寸評

記事を読んで「自分のやりたいことを貫くことで、いばらの道を進むことになる」という厳しい現実を感じたことが、目の前の事に全力で取り組む決意につながったと分かります。